浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

第350号
平成24年12月

電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
choonji@aichi.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/　ナモの寺 検索
〒456-0034　名古屋市熱田区伝馬一丁 10-11

【語意】施無畏（せむい）
仏・菩薩が衆生のおそれを除き、救うこと。

兵庫県豊岡市
安国寺のドウダンツツジ
撮影：超空正道

奈良大仏の
右手の相は
「よしよし
　おそれるでない
　救ってやるぞ」
という施無畏印（せむいいん）

施無畏とは
仏が菩薩が
衆生のおそれを除き
救うこと

医者が患者の
先生が生徒の
親が子供の
不安を取り除くのも
友が友を支えるのも
この施無畏の菩薩行（ぼさつぎょう）

人は衆生がゆえ
一人苦しめば餓鬼（がき）地獄（じごく）
人は衆生なれど
共に苦しめば仏菩薩

施無畏（せむい）

一年は三百六十五日、一日は二十四時間、一時間は六十分、一分は六十秒、厳密には、閏秒・閏日（閏年）で調整をすることはありますが、一定の時間や期日に長短があろうはずはありません。時計の針は、いつも同じ速さで時を刻んでおります。距離の長さも同様で、物差しが、伸びたり縮んだりしては困ります。

ところが、私ども、そうは思えない場面に遭遇することがあります。「**眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い。**（『法句経』中村元訳）」と、釈尊はおっしゃっておられます。眠れなかったり、足が重く動かないということは、辛いことです。そればかりでなく、不安や恐れ、心身の苦痛は、早く過ぎ去って欲しいと願うものです。

人にはそれぞれの人生がありましょうが、苦痛の連続で、将来の展望が全く見えてこず、ただ疲弊困憊するだけのような人生は、誰しも送りたくはありません。でも、そのような耐えきれないような苦しみを強いられている方も、実際にはおられるのであって、そのような方にとって、人生は、まことに辛く長いものと感じ取られているに違いないのであります。

知人で、うつ病を若い頃経験された方がいて、今は見事克服されているのですが、当時それは正に、出口が全く見えない地獄のような苦しみであったと述懐されておりました。人間の感覚というものは、ある意味いい加減であてにならないもので、楽しいことをしていると、一時間二時間はあっという間に過ぎてしまいますが、心身の痛みで苦しんでいるときは、一時間が、いや一分一秒すら長く感ずるものです。ですから、ときにこの世が地獄になるんですね。

ところで、地獄には、ランクがあることご存じでしょうか。**八大地獄**といって、**等活地獄・黒縄地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・焦熱地獄・大焦熱地獄・阿鼻地獄（無間地獄）**の八つがそうです。

地獄の中で最上層に位置するのは**等活地獄**で、いちばん軽いランクでありますが、地獄というからにはたいへんなもので、獄卒（鬼）に責めさいなまれて死んでも、涼風が吹くや生き返り、あるいは空中に声があって生き返り、再び同じ責苦をうけることを繰り返すこと五百年、ただし、人間界の時間経

過とは異なり、換算し直すと、約1.7兆年というからすごいです。最下層に位置する**阿鼻地獄（無間地獄）**にいたっては、ここに真っ逆さまに落ちて到達するまでに二千年を要し、その苦しみたるや、他の七地獄が夢の幸福と思えるくらいに過酷なもので、寿命は一中劫、詳しい説明は省かせてもらいますが、宇宙的時間を経過しないと解放されないといいます。ただ、キリスト教などでの地獄は永久ですが、仏教での地獄は、とてつもなく長い年月ですが、一中劫という、有限の期間であるところに、一抹の救いを感じます。

さて、自分が地獄に居ると仮定したならば、「とてもそんなに待つことはできない」、さりとて、解決の糸口すら見つけられず、思うことはただ一つ、「早くこの苦しみから解放されたい」ということでありましょう。ご安心ください。危難や苦しみのときに、思いがけない助けにあったときに「**地獄で仏に会ったよう**」と表現することがありましょう。「**地獄に地蔵**」ともいいますが、地獄にも、仏様やお地蔵様が来てくださるのです。

芥川龍之介の『**蜘蛛の糸**』は、極悪で地獄に堕ちたカンダタが主人公です。たった一度だけ蜘蛛を助けたことがあったことから、お釈迦様は、極楽の蜘蛛の糸を垂らして、地獄から救い出そうとされました。しかし、カンダタは、後から続いて上ってくる者たちに「これは俺のものだ。降りろ」といったとたん、糸はぷっつり切れて、また地獄へ堕ちていったと描かれています。

こちら奈良の大仏様の右手、**施無畏印**といいます。「よしよし、お

それるでない。救ってやるぞ」という姿です。仏様が、いつでもわれわれの不安や恐れを取り除いてやるとの表現です。娑婆の雑踏にも、地獄にも、仏はおられるのです。ただ気づけないのです。しかも、カンダタのように、仏の慈悲に会っても、一人よがりで、真理に疎い者は、悲しいかな、地獄に沈淪するしかないのであります。

施無畏は**布施行**の一つです。医者が患者の、先生が生徒の、親が子供の不安を取り除いてやるのも、友人が落胆しているときに支えてあげるのも、この**菩薩行**です。われわれ衆生は、仏菩薩ではありません。しかし、苦しんでいる人と**共に苦しみ**、支えてあげようとしたとき、菩薩となり仏となるのです。

◎接待（せったい）、招待（しょうたい）

誰かを招き、もてなす行為を指すことばだが、元来は一つのことばであり、「**摂待**」「**接待**」から派生したもの。摂や接は、しょうとも読む。

かつて聖地をめぐったり、名僧に教えを乞わんと各地を修行する行脚（あんぎゃそう）僧は、門前の路上で湯茶を振る舞われるという習慣があった。この習慣は、やがて往来の一般庶民に対しても行われ、「**門茶**（かどちゃ）」と呼ばれるようになる。これが、禅家慣例の「**行茶布施**（ぎょうちゃふせ）」と呼ばれるものである。謡曲の一節に、〝祖母にて候う者この接待を始めて候……とあるが、この場面は熱心な信者が路上で湯茶を振る舞ったありさまを指しているものと考えていいだろう。

つまり、本来の接待は、お礼や感謝のためではなく、純粋な篤志的行為だったのだ。

やがて、わざわざ客を招いてもてなす行為も、この接待が当てられ、後に「**招待**」という招請の意味の語が生まれるのである。

（『仏教のことば』ひろさちや監修）

今月の一言

牛は水を飲めば
乳となる
蛇は水を飲めば
毒となる

雑記

▼三回忌

先代の慎空道研上人の三回忌を、ちょうど一ヶ月早めて、11月18日、法類寺院、檀信徒総代、親類縁者の方々列席の下、勤めさせていただきました。

背丈ほどある大きな卒塔婆の頭の部分に、「〇」という円相を書くのですが、これがなかなかうまく書けません。まだまだ、修行が足りないようです。

◆**六尺の卒塔婆したゝめ道研忌**

◆**三回忌未だ円相定まらず**

▼焼きいも

オーブントースターが壊れてしまったので、少し高め、といっても一万円しませんが、この度購入しました。最近のものは、なかなか便利にできていますね。早速「焼きいも」に設定して試し焼き。

これは思いの外、簡単・手間いらず・ベリーグッド!!であります。

◆**芋焼きて半分ずつの甘さかな**

▼誕生日

十一月は、私の誕生月です。もう何回となくその日を迎えるわけですが、年々、その重みが増してくるように感じます。

◆**掃き集む落ち葉親しき六十四　沐魚**